

U14a 新光子モデルと現行光子モデル 及びそれぞれからの宇宙像等

藤原ケイ

我々人類は光（光子）を通して宇宙を見ている。

しかし この最も頼りとする”光子そのもの”について十分な理解が出来ているとは言えないようである。

[現在の光子像 *モデルとは呼ばないが一般的な理解]

- ・粒子であり波動でもある。 <それではどんな粒子？ どんな波動？>
- ・質量は無いが、運動量があり、 $h\nu$ という飛び飛びのエネルギーを持っていて、電荷はゼロ、スピンは1で、偏光があり、ダブルの横波で、直進する。 <単なる測定結果の羅列？>
- ・真空内ではCの速度を持ち、物質内では減速（Auなどでは加速）する。 <何故なの？>

筆者は、光子についてのこのような状況を踏まえ、プリズムでの速度挙動を加えて深く考察し、新たな「光子モデル」を提案している。（2020 秋、2021 春天文学会）

新「光子モデル」＝「プラス／マイナス始粒の交互配列・二重鎖構造の自力運動体」

*二本束ねのロケットのような形で、自らを燃料として噴出して速度を得ているもの。

前回の講演では 新モデルに大きな矛盾や齟齬が有るわけではないことを中心に示した。

今回は 三回目として新モデルと現行モデルの違い、これらのモデルから推測出来る”宇宙像”について考察する。

*一回目（2020 秋） ”光子は減衰する” 赤方偏移現象のこと。 偏移量は距離そのもの。

*二回目（2021 春） ”光子の反射・屈折・干渉挙動” 見方の変更は必要だがモデルとしては成立。